

鳩間方言の漁業語彙

加治工, 真市

(出版者 / Publisher)

法政大学沖縄文化研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

琉球の方言 / 琉球の方言

(巻 / Volume)

10

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

24

(発行年 / Year)

1986-03-15

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00012650>

鳩間方言の漁業語彙

加治工真市

鳩間島は、明治末期頃に沖縄本島の本部町よりプーシン [pu:ʃiŋ] (鯉業用の帆船) を導入し、糸満や久高島、奥武島からはイカ釣り漁を導入して、半農半漁を生業としてきたといわれている。それ以前は農業を中心とした集落であった。漁業は環礁を利用してなされる、いわゆる自家用の漁獲を目的とする程度のもので、イソー¹パルン [ʔiso:paɾuŋ] (漁りに行く) と言われた。その最も原初的な形態がカキ [ka:ki] (垣) によるものであった。垣は遠浅の海中に山石を50センチないし、1メートルの高さに積みあげたものである。満潮時には水没して、その上をイダフニ [ʔidaɸuni] (板舟、サバニ) も自由に航行できるが潮が干くと、いちいち「垣」の入り口、出口を開けなければならなかった。これをフチアキ [ɸu:ʧi-ʔaki] (口開け) と言った。満潮時に「垣」の中に入り込んだ魚類は干潮で逃げ道を失い、垣内の水溜りなどに残される。それを人々が見まわって漁獲する漁法で、全く自然の力を利用したものであった。現在では、西表島北岸の伊武田から泊田のカタバ^イル [ka:taɸaɾu] (干潟、潟原) に積まれたのが残っているだけである。

伊武田村は、往古、鳩間島の住民が稲作のために、小屋がけをして一時的に住むために作られた所である。今ではジャングルの中に、かつての屋敷跡をしのばせる石垣が樹々の根

に絡まれ、覆われて残っているのみである。明治末期頃までは、伊武田村も残っていたが、その後、人々はだんだん各自のター¹スク [ta:sku] (田作りの場所) のニュー¹レ [nju:re] (荷おろし場) へと移っていった。人頭税制が廃止されて、稲作のために、島人を伊武田村に集めて監督、督励する必要がなくなったからだという。

本稿では、鳩間島の漁業に関する語彙について、可能なかぎり島の生活と関連づけつつ記述してみることにする。記述は、1 環礁漁業、2 沿岸・近海漁業、3 養殖漁業、4 魚名の比較、の順で進める。

1. 環礁漁業語彙

1.1 海岸地名

環礁漁業は島をとりまく環礁において営まれる漁業のことである。当然のことながら、漁の行われる場所には詳細に地名が付されている。島をとりまく珊瑚礁のリーフを、ここでは便宜上「環礁」と定めたが、方言では、ピー [pi:] (干瀬) という。鳩間島のピーは、島の背面(北側)においては切れ目なく続いているが、前面(南側)においては、数か所において切れている。そこをフチ [ɸu:ʧi] (津口) という。船はそこを通過して島に出入りする。次に、これら環礁に付された地名を示す。

① アーラマイズニ [ʔa:ra-maidzuni] (東前曾

根) 鳩間島の前、西表島との間に発達した珊瑚礁。これをマイズニ [maidzuni] (前曾根) と総称する。前曾根の東側に分かれて形成された干瀬をアーラマイズニという。このズニは、ナカヌ¹・スニ [nakanu-suni] (中の曾根) に続く。タカビ [takabi] との間に航海船の通航が可能なフチ [ɸɸtʃi] (津口) がある。

- ②アーヤブイ [ʔaja-bui] アーヤ (寄合三戸氏) が航路標識をたてた曾根。タカビヌ・フチ [takabinu-ɸɸtʃi] (高干瀬の津口) を回って港に向う途中にある。
- ③アガジル [ʔagadziru] ミズヌカンの側にあるアガナーサキ [ʔagana:saki] よりパマザ¹キ [pamadzaki] (浜崎) の方へかけて延びた浅瀬。海藻の色が赤く見える所である。
- ④アガナーサキ [ʔagana:saki] 島の東南方、タカビの津口からタカビの干瀬沿いに北へ延びるミズヌ¹カン [midzunu-kag] と呼ばれる水深50メートル程の濡がある。その側にウール [ʔuru] (枝珊瑚) に覆われた浅瀬で、魚がよくとれる所をいう。
- ⑤アマセヌ・フチマチル [ʔamafenu-ɸɸtʃimatʃiru] アマセ (小浜家) の先祖が、よくフチマチル [ɸɸtʃimatʃiru] 漁をしたと伝える所。トン¹グワーの南側にある。
- ⑥アントヌ・ズンズンヌ・フチ [ʔantanu-dzundzunu-ɸɸtʃi]。島の東北東にあるズンズンの口に当たる所。干瀬部分が一段と低くなっており、満ち潮のときは外洋から海水が礁池の方へ流れ込む所。
- ⑦イーリ・マイズニ [ʔiri-maidzuni], マイズニ (前の曾根) の中の西側に発達した大きな曾根。西表島の上原や船浦方面より鳩

間島へ操船して来るとき、この曾根に当たる。この曾根にはトゥーラ¹ン・フチ [turran-ɸɸtʃi] (通り抜けられない津口) という所があるので注意を要する所であるが、ここがまたムチイズ [mutʃi-idzu] (のこぎりだい) の巣である。ムチイズを釣って、それを生きたまま釣り針にかけて[ニール [ni:baru] やアカジナー [ʔakadzina:] (すじはた) などを釣る。

- ⑧イシケーズニ [ʔiʃke:zduni] フターチスニ [ɸɸtatʃisuni] の西側にある曾根。鳩間からフノー¹ラ [ɸunora] (船浦) 方面へ向う船は、フターチスニとイシケーズニの間を抜けて通る。
- ⑨ウー¹グチ [ʔugutʃi] (「大口」の義) 定期航海船の出入りする干瀬の津口。西表白浜行きの船はここから出入りする。島の西南西に位置する。側にクチ¹グワー [kɸtʃigwa:] (小津口) がある。標識が立てられており、潮の干満に関係なく、大型船が出入できる。
- ⑩クー¹シビー [ku:ʃibi:] 島の西方、やや北よりある干瀬。フチマチル [ɸɸtʃimatʃiru] 漁の行なわれる所である。
- ⑪クサン・クムル [[kysag-kumuru], 糸満の人はこの漁法をヒータマラサ [çitamarasa] という。タチ¹バル・パマ [tʃtʃibarupama] (立原浜) からピーヌ¹・ティジ [pi:nu-tidzi] (干瀬の頂上) へ続くリーフは、左側のフンシキ [ɸunʃiki] と約40センチほどの段差がある。ここは干潮時の海水が落ちるように流れる所で、それを利用してクサン網を入れて漁をする所がクサン・クムルである。袋網を仕かける所がクム¹ル [kumuru] (「籠」^{コモリ}, 水深2~3

- メートルの礁地を形成している所)である。
- 別名 [ウブシケヌ・アー¹ヤ・クム¹ル
[ʔubufjkenu-ʔa:ja-kumuru] (大城家のお父さんのクムル), またはクシケヌ¹・アブ
ジェー・クム¹ル [kufikenu-ʔabudʒe:kumuru] (小底家のおじいさんのクムル)ともいう。
- ⑫クチ¹グワー [kɯtʃigwa:] (「小さい津口」の義)ウーグ¹チ [ʔu:ɡutʃi] (大津口)とクー¹シビー [ku:ʃibi:] の間にある小さな干瀬の口。水深が浅いので、鰹船などは満潮時に通行した。
- ⑬グザラブ¹ジェー¹・クム¹ル [ɡudzaraʔudʒe:kumuru] (米盛家の先祖、グザラブジェーがよく漁をした所)。魚がグザラグザラとたくさんとれたので命名されたという。島仲浜のピー [pi:] (干瀬)よりやや東に寄ったところの干瀬にある大きなクムル。
- ⑭ズンズン [dzundzun] 島の東北と西北の二か所にある、礁頂部から礁池部へかけて約40センチほどの珊瑚礁の段差がある所。
- ⑮シンビン¹ヤー [ʃimbɪn-ja:] イシケーズニとマルズニの内側に、水深8尋ほどの海底に煎餅状の平たい珊瑚礁がある。そこは鰹の餌になるヤナザ¹コー [janadzako:] (特定の場所にいる小魚)の巣といわれている。ムチイズも多い。
- ⑯タカビ [takabi] 島の南東部、ナーバレから南へ延びる干瀬。ここにはシンイシ [ʃin-ifi] (積み石)があって、他の干瀬より高くなっている。普通の珊瑚礁石と異なり、海底火山が噴火したときに噴出したような溶岩に似ている石だという。鳩間島の屋敷の石垣はここから石を運んで積んだ。
- ⑰タカビ¹ヌ・インタヌ¹・スニ [təkabinu-ʔintanu-suni] タカビの西側にある曾根。海路標識がたっており、石垣島から入港する船や、久浦、泊田、慶田、ヨシキラ、崎田あたりの田地耕作のためのイダフニも、この側から出入りする。
- ⑱タカビ¹ヌ・ウブ¹イシ [təkabinu-ʔubuiʃi] タカビにある大石のある所。
- ⑲タカビ¹ヌ・フチ [takabinu-ʔuʧiʃi] タカビの西、アーラマイズニとの間にある津口。島の南南東の方にあり、鳩間島の代表的な津口で、石垣・鳩間・白浜の定期航海船の出入りする所である。
- ⑳トゥン¹グワー [tuŋgwa:] 島の北西の干瀬の津口の近く、アマセヌ・フチマチルの北側にある干瀬。
- ㉑ナーバレ [na:bare:] 島の東北東にあるナラ¹リパマ [nararipama] (ナラリ浜)から延びる干瀬。タカビに続く干瀬であるが、この部分は細長くくぼんだ所で、満潮時にはイカ釣り舟を通過させることができる。鰹船も大潮の満潮時には通航できる。満ち潮は外洋からこの部分を通って礁池部に流れ込む。流れが早いので、歩いてタカビへ潮干狩りに出かけるときは、この溝を越えることに気を配った。
- ㉒ナーバレヌ¹・ウブ¹イシ [na:bare:nu-ʔubuiʃi] ナーバレにある大石。その石のある一帯をさしている。
- ㉓ナカウ¹ル [nakau:ru] タチバル浜とピーンティジ [pi:ntidʒi] (干瀬の頂上)との中間に、礁池部へ続く凹地があり、ウール [ʔu:ru] (枝珊瑚)の密生したところ。タコヤ、フクラ¹ペー [ʔu:kurabe:] が干潮時

によくとれる。

- ②④ ナカヌ¹・スニ [nakanu-suni] (中の曾根) マイ¹ズニ (前曾根) の中の一つ。鳩間棧橋と真南方に位置するパトゥ¹マレー [pātumare:] (鳩離島) を結ぶ線上にある。イリーマイズニの東にあり、それとイーリマイズニとの間にある干瀬の切れた所 (津口) は、上原や船浦へ往来する船が通う小さなフチ [ɸɸ̄tɸ̄ji] (津口) である。
- ②⑤ ピーナ¹サキ [pi:na:saki] ムチイズ [mutɸ̄iidzu] の夜釣りの名所。フキクムルの東側に南北に細く延びた浅瀬。
- ②⑥ ピーン¹ティジ [pi:ntidzi] 環礁の頂上部分。「干瀬の頂き」の義。干瀬は外洋部へ急傾斜するか、切り立つような絶壁状になって形成されている。その外洋に接する部分をピーヌ¹・クシ [pi:nu-kuɸ̄ji] (干瀬の後背部) という。外洋部から干瀬の頂上部へ深い溪谷が切りこんでいる部分を、ヤトゥ [jatu] という。ヤトゥの上部はカソーラ・イシ [kasora-ʔiɸ̄ji] (テーブル珊瑚) で覆われている。あるいは、ヤトゥが大きなクム¹ル [kumuru] (籠り池) を形成している場合がある。大潮のとき、夜の干瀬時に村人たちはここへ来てパシ¹ナー [paɸ̄jina:] (または、パチ¹ナーともいう「いっとうだい」の仲間) を釣る。干瀬の頂上部は盛り上っていて、いわば、環礁は島を珊瑚礁の堤防でめぐらしているようなものである。満潮時には外洋から満ち潮が泡を浮べて、ひたひたと寄せてくる。その中に、大波に乗って魚たちが干瀬の海藻を食べに上ってくるのが見える。干瀬の頂上を海水が越えると海水は堰を切ったように礁池の方へ流れていく。このようにして満ち潮は海岸部の干

瀬や遠浅の干潟を海面下に隠していく。

- ②⑦ ピザキ [pidzaki] 島の北西端の干瀬。ミー¹ミナ [mi:mina] (広セ貝) やビキミナ [biki-mina] (高セ貝) が多く、干潮時には婦人たちが潮干狩りに行く所。タコや、さざえ貝などもよくとれる。そこへ行く場合は、¹フチ [ɸɸ̄tɸ̄ji] (わらじ) を二足用意した。
- ②⑧ ピナカン・クムル [pinakaŋ-kumuru] ナーバレーを越えて、タカビへ行く途中の干瀬の頂きにあるクム¹ル [kumuru] (籠り池)。
- ②⑨ フカムス¹ク [ɸɸ̄kamusyku] フカバガ浜に続く干瀬の外側。干瀬の外側は普通フカムス¹クという。
- ③⑩¹ フキクムル [ɸɸ̄kikumuru] 島の西北部にある礁池の深い所。シナカキ¹ヤー漁が行われる所で、魚がよくとれる。
- ③⑪ フターチスニ [ɸɸ̄tɸ̄tɸ̄ji-suni] タカビ¹ヌ・インタヌ¹スニの西側にある小さな曾根。
- ③⑫ フチマチル [ɸɸ̄tɸ̄jimɸ̄tɸ̄jiru] フキクムルの近くの干瀬の裏側、外洋部に接する所。フチマチル漁をするところ。外洋からフチマチルへ海藻を食べに上ってくる魚は干潮時にはフキクムルの方へ下りていく。
- ③⑬ フンシキ [ɸunɸ̄jiki] ナカウ¹ルとタチ¹バル・パマ [tɸ̄tɸ̄jibarɸ̄-pama] の中間地帯。たこがよくとれる。ズンズンとは30~40cmほど段差があるので、干潮時には海水が落ちるように流れていく。
- ③⑭ ボー¹ダヤー [bo:da-ja:] 「きつねぶだい」の家の義。ぶだいのよくとれる所。立原の西北の干瀬のフカムスクにある。
- ③⑮ マルスニ [marusuni] イシケーズニの西側にある円い曾根。
- ③⑯ マチャーヘースニ [matɸ̄a:he:suni] マ

チャーヘー(大城真津氏)が鰹漁船のザコーバ [dzako:ba] (餌とり場)にした曾根。フターチズニの内側。ヤマ¹タジルの南にある。アーヤブイの東側にある。

③⑦ ミーグチ¹グワー [mi:gutʃigwa:] イーリマイズニの西側にある干瀬の津口。ウーグチの後に使われたので、「新しく使われた津口」の名がつけられた。〜グワーは沖縄方言であり、鰹漁業が導入された後の命名を物語っている。

③⑧ ミズヌ¹カン [midzunu:kan] ナーバレーの干瀬の内側からヤマ¹タジルへかけてのび

た幅100メートル、長さ約500メートルの水深約50メートルの濡。

③⑨ ヤトゥ [jatu] 干瀬の外洋部が内側へ深く切り込むように形成された深い溪。

④⑩ ヤマ¹タジル [jamatadziru] アー¹ヤブイの北側、ミズヌカンの手前にある曾根。鰹船の餌とり場。

④⑪ シマナカヌ・フンシキ [ʃimanakanu-Φunʃki] シマナカ・パマ [ʃimanaka-pama] から干瀬へ続く途中の礁池部。

珊瑚礁部分の形状と名称を图示すると次のようになる。

図1 (島の裏側の珊瑚礁地形)

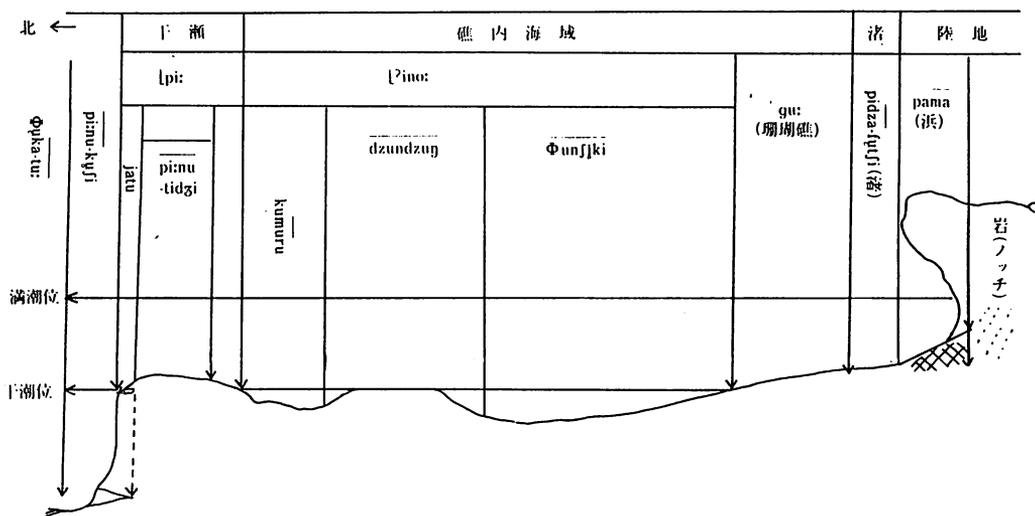
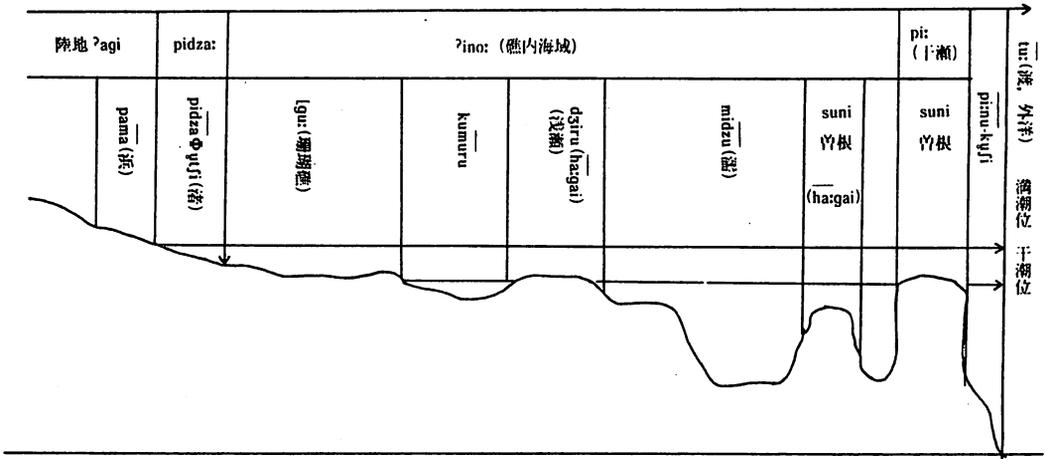


図2 (島の表側の珊瑚礁地形)



1.2 漁法語彙

1.2.1 1クサン [[kusaj]

別名, アンブシ [ʔambuʃi] ともいう。糸満漁師から伝えられたもので, クサン漁法とは多少異なる面がある。アンブシは主として, 西表北岸のカタブル [kʌtabaru] (干潟) で竹や木串を砂浜にさして, それに網をつるすようにして張りめぐらし, 漁をする点, クサンと異なる。

クサンは, タチバル・パマ [tʌtʃibaru-pama] (立原浜) のズンズンの側のクムルに袋網を入れる場合と, 島の東北のフカバカヌ・パマ [ʔukabakanu-pama] (外若の浜) のズンズンのクムルに網を入れる場合がある。タチバルのフンシキ [ʔunʃiki] には, 1ウブシケ・ア-1ヤ・クム1ル [ʔubʃikʌ-ʔa:ja-kumuɾu] (大城家のお父さんの籠り池<礁池>) や, クシケヌ1・アブジェ-クム1ル [kʃikʌnu-ʔabʃʌ:kumuɾu] (小底家のおじいさんの籠り池)

にフクル1・アン [ʔukuru-ʔaŋ] (袋網) を入れて漁獲する。シマナカヌ・ピー [ʃimanakanu-pi:] (島仲の干瀬) の場合は, グザラブジェ-1・クム1ル [gudzarabudʒe:kumuɾu] (米盛家の先祖, グザラブジェ-が網を入れて, グザラグザラするほど大漁したと伝える籠り池) において網を入れて魚をとるのが普通である。これらのクム1ル [kumuɾu] (籠り池) をクサン・クムル [[kusaj-kumuɾu] という。この漁法には次の漁具が用いられる。

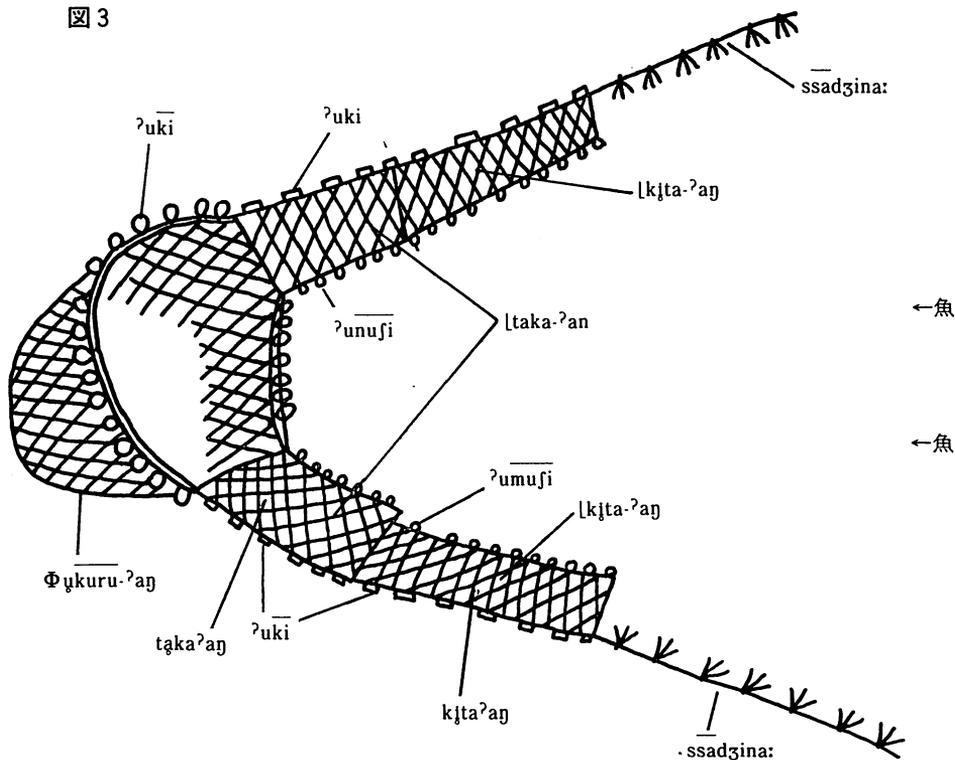
- ①フクル1・アン [ʔukuru-ʔaŋ] (袋網。網の目は約1センチ平方の大きさで, 幅約10尋, 高さ約12尋の網である)。袋網をクムルの中央に入れ, 袋網に1タカアン [[tʌka-aŋ] (高網) や1キタアン [kʃita-aŋ] を繋いで最後に, ッサ1ジナ [ʃsadʒina] (魚おどしの網) に繋ぐ。網の足には宝貝をつけて重石とし網の頭には□形の板の浮きをつける。

- ②¹タカ・アン [ʔtaka-ʔaŋ] (「高網」の義)
 高さ約2尋, 長さ約5尋の網で, 袋網に
 繋ぐ。網の足には宝貝を結んで重石とし,
 網の頭には, 長さ約1尺, 直径約1寸の
 棒状のウキ [ʔuki] (浮き) を付ける。
- ③¹キタ・アン [ʔkita-ʔaŋ] (「桁網」の義か)
 高さ約1尋, 長さ約5尋の低い網。タカ
 アンに繋いで用いる。網は通常, 上記の
 長さを単位とし, それを¹キタ [ʔkita]
 で表わす。プス¹・キタ [pʊsu-kita] (1
 張) フタ・キタ [ʔuta-kita] (2張) ミー

キタ [mi:kita] (3張) 等々。各種の網
 は袋網を中心にして左右に袖状に3~4
 キタ繋いで, それにッサジナを繋ぐ。

- ④ッサジナ [ssadgina] (「草網」の義か)
 藁縄に, バラフ¹タ [baraʔuta] (藁)
 を結んで垂らしたもの。網に繋いで, そ
 れを干瀬の頂上部へ張る。海中では藁が
 ゆらゆら揺れるので魚を脅して, だんだ
 んと魚を袋網の方へ誘導する役割を果た
 す。次にアンブシの様式を図示する。

図 3



④ヤシ¹ミーアン [ja¹mi:ʔaŋ] (八十目網)

ク¹ク・ガラシ¹・アン [ku¹ku-gara¹si-ʔaŋ] (クスクを漁獲する網) や
ボ¹ダ・ガラシ¹・アン [bo¹da-gara¹si-ʔaŋ] (ボ¹ダを漁獲する網), フチマチ
ル¹・ガラシ¹・アン [ɸ¹ut¹mat¹firu-gara¹si-ʔaŋ] (フチマチル漁獲用の網) な
どは、網目の荒いこのヤシミ網を用いる。

1.2.2 タタ¹カー [tata¹ka:] タカアンやキタ
アンを4~5 k¹ta 繋ぎ合わせて、魚の通
る路に張っておき、数人の者が竹芋や棒な
どで海面を打ち、ウール [ʔu:ru] (珊瑚)
を突いて、魚を追いつめ、網にひっかけて
漁獲する漁法。夜は三、四で組んでピザ¹
フチ [pidzaɸut¹si] (渚) で漁獲する。

1.2.3 フチマチル¹・ウラ¹シ [ɸ¹ut¹mat¹firu-ʔura¹si]

タカアンやキタアン、ヤシミアンなど
を使って、主として島の西北西の干瀬のフ
チマチルで行なわれる漁法。満ち潮に乗っ
てピーヌクシ [pi:nu-ky¹si] (干瀬の外) か
ら、海藻を食いに、干瀬の頂上へ上って
くる魚を巻いて漁獲する漁法。これは潮ど
きと、魚が下る方向をよく見定めないと失
敗する。

1.2.4 シキマーシ [ʃ¹ki¹ma:ʃi]

¹イダフニ [[ʔidaɸuni] (板舟, サバニ)
に乗って、干瀬や、イノーを、竿をさしな
がら片手で操舟し、片手でタマウ¹キ
[tama-ʔu:ki] (「玉桶」の義か。桶の底を
抜き、ガラスを張って海底をのぞき見る漁
具) を使って海底をのぞき、タコや魚を突
いて漁獲する漁法。¹ギラ [lgira] (しゃこ
貝) や¹ミナ [[mina] (「蜷」の義か。高
七貝や広七貝, さざえ類) も拾う。

1.2.5 イソー [ʔiso:] (潮干狩)

鳩間島では「漁に行く」ことを、イソー¹
バルン [ʔiso:p'arun] という。専門の漁師
でなくても、誰でも干瀬へ潮干狩りに行く
ことができるから、潮干狩りを含めて、漁
に出る人は皆、イソープス [ʔiso:pusu] (漁
師) と言う。島は四周を干瀬で囲まれてい
るから、毎日、潮どきを見はからって、夕
食のおかずの魚介類をとりに行くことがで
きる。干潮時の潮干狩りは、主として婦
女子や男の子たちがするのであり、男の大人
たちは、素潜りで漁をするのが常であつた。
婦女子が用いる漁具は、ほぼ次のようなも
のであつた。

①¹ガルユクン [[garujukuŋ] (鉤のある^つ箆)

主として、タコをとるのに用いる。穴の
中にあるフクラ¹ベ [ɸ¹ukurabe] (たす
きもんがら) などは、このガルユクンで
ないと漁獲できない。

②シー¹メー・ユクン [ʃi:me:jukuŋ] (鉤
のない^つ箆)③ティンガラー¹マ [tingara:ma] (金串の
一種)

サク¹ラ・ギラ [saku¹ra-gira] やイシ
ギラ [ʔiʃigira] (珊瑚礁の中にあるシャ
コ貝をほじくり出す漁具)。サクラギラ
は煎じ薬 (高血圧症に効くといわれる)
としても愛用される。

④アン¹スク [ʔansuku] アダンの気根で
あるアダナ¹シ [ʔadana¹si] の繊維にな
った縄を編んで作った野外用の物入。⑤¹フチ [[ɸ¹ut¹si] 藁で作ったワラジ。こ
れを履いて潮干狩りに行く。ピザ¹キ
[pidzaki] などのような遠い干瀬, 「干
瀬先」へ行くときは、¹フチ [[ɸ¹ut¹si] を

二足用意した。タカウ¹ル [taka-[?]uzru] (枝珊瑚) の多いフンシキ [ɸunʃiki] あたりも¹フチ [[ɸutʃi] の切れやすい所である。

以上のような漁具をもって潮干狩りに出るが、月夜の潮の干く日には¹タク [taku] (蛸) がよくとれた。また、シキダ¹チ, [ʃikidatʃi] (朔日), ズングニチ [[dzungunitʃi] (十五日) には、夜の干潮時に干瀬のヤトゥ [jatu] へパシ¹ナー [paʃina:] (いっとうだいの仲間) を釣りに行った。

潮干狩りで漁獲される魚介類は大旨次のようなものであった。

- ①ビキミナ [bikimina] (「雄貝」の義。高七貝)
- ミー¹ミナ [mi:mina] (「雌貝」の義。広七貝)
- ③ヤダン¹ブレ [jadambure] (ソデガイの仲間)
- ④ブドウ¹ク [buduku] (イモ貝の一種、サラサミナシ)
- ⑤サク¹ラギラ [sakra-gira] (シャコ貝の一種)
- ⑥マーギラ [ma:gira] (シャコ貝の一種)
- ⑦ユナーミナ [juna:mina] (イモ貝の一種)
- ⑧¹アサルゴー [[[?]asarugo:] (貝の一種)
- ⑨パモ¹ル [pamoru] (蛤)
- ⑩タク [taku] (蛸), ミュートウ¹・ダク [miju:tu-daku] (夫婦蛸), ウム¹ジ [[?]umudʒi] (小蛸)
- ⑪イラブ¹チ [[?]irabutʃi] (すじぶだい)
- ⑫¹ニバル [nibaruru] (さらさはた)
- ⑬フクラ¹ベ [ɸukurabe] (たすきもんがら)
- ⑭¹ウジ [[?]udʒi] (きりあなご, はも類)

⑮¹サザミナ [sadzamina] (さざえ貝)

2. 沿岸, 近海漁業語彙

2.1 鰹漁業語彙

鰹漁船のことを鳩間方言ではカツシン [katsufin] (鰹船) という。カツシンは明治末年に沖縄本島のムトゥ¹ブ [mutubu] (本部町) から導入されたといわれている。当初はプーシン [pu:ʃin] (帆船) で、六挺艫あるいは八挺艫で漕ぐ船であったという。撒水器もなく、竹を割ったもので水を跳ねて鰹を釣ったといわれている。これをスー¹パニ [su:pani] (潮はね) という。

発動機船が導入されたのは昭和に入ってからである。カブシンカ [kabuʃinka] という、一種の組合を組織して運営したが、20~30人で一組合を作った。組織はほぼ次のような構成になっていた。

- (1)ウヤ¹カタ [[?]ujakata] (親方) 経営者
- (2)フナ¹カク [ɸunakaku] (乗り組み員)
乗組員は次のようにランク付けされる。
 - ①シン¹ドゥ [ʃindu] (船頭, 船長)
 - ②キカン¹チョウ [kikantʃo:] (機関長)
 - ③イチバン¹ジョウ [[?]itʃibandʒo:] (一番釣り手)
 - ④ホンマ¹キ [hommaki] (餌撒き)
 その他のフナ¹カクはティンmamuchi以外平等である。上記の四名は、いわゆる責任ある地位が与えられている。①のシンドゥは船の総責任者。②のキカン¹チョウは機関室の総責任者である。③のイチバンジョウは、いわゆる漁撈長で、豊富な漁業経験者が選ばれる。彼は船長をよく助け、出漁、漁場、漁法等について船

長に助言し、協力する。④のホンマキは、鯉が撒き餌に食いつくようイチバンジョウや船頭の指示に従って餌を撒く係である。鯉鳥の飛び方、潮の流れを見定めつつ、鯉の食いつきを判定するタイミングをうまくとらえなければならない。餌の入れ方の上手、下手はその日の漁獲を左右する。釣り始めは撒水器の始動と同時である。鯉の食いつきが弱くなると本餌をイキ¹マ [ʔikima] (生け間) よりタブ [tabu] で掬い、撒き入れる。この①③④②の呼吸が合わないと不漁になる。

⑤ティンマムチ [timmamutʃi] (小天馬係) ティンマムチは学校卒業したての、15、6歳の少年が漁業見習いの形で引き受けさせられる。鯉の餌とりが済むと小天馬は本船に曳航されて港まで来て放される。ティンマムチは、それをリュウ [rju:] (籠) で漕いで港内に帰り、砂浜に引き揚げると、沖から船が帰ってくるまでに、船の水汲みと薪割の作業を済ませる。最盛期には一日に、フタカブ [ɸɯtakabu] (二度出漁)、ミーカブ [mi:kabu] (三度出漁) までするから大変苦勞の多い仕事である。しかしティンマムチは一人前としては扱われない。

(3) シーズー¹ヤー [ʃi:dzɔ:ja:] (製造屋)

鯉節製造工場のことをいう。そこに働く人はシーズー¹ニン [ʃi:dzɔ:nin] (製造人) と言う。シーズー¹ヤーには、総称ナヤ [naja] (「納屋」の義か。鯉節製造用の器具を置き、実際に仕事をする所) と言い、そこにはバイカン¹ガマ [baikag-gama] (「煤乾籠」の義か。大きな籠の上に、煮たてた鯉を節型に仕あげて幅約1m、長さ約2m

のセーロ [ʃe:ro] (蒸籠) に詰め、それを数枚重ねて、籠に薪を燃やし、その煙と熱でいぶして燻製にする所) やイズ・ネーシーシ・ガマ [ʔidzu-ne:ʃigama] (魚を煮る大籠) がある。このイズネーシ籠には大鍋(直径約1.20m、深さ約2m)を三つ据付け、ナカ¹ワリ [nakawari]、ヨツワリ [jotsuwari] にした鯉を、直径約90cm、高さ約10cm程度のカグ [kagu] (煮かご) に詰め、その上に¹ガヤー [gaja:] (茅) をまぶしてそれを17~18枚重ねて、一つの大鍋に入れて煮る。また別棟を建て、室内を二、三段に棚をかけ、バイカンガマで半乾燥をした鯉節をそこへ移し、下から薪を燃やして更に乾燥をかけ、燻製する。燻製の度合により、一段から三段目へと鯉節を移して完成する。その棟屋をバイカン¹ヤー [baikap-ja:] という。

(4) 鯉節 (カツブシ [kʌtsubuʃi]) 製造工程

① カツヌ¹・スブルキシ [kʌtsunusuburu-kʃi:] (鯉の頭切り)

本船から浜に陸揚げされた鯉は、海辺で頭を切り落とし、ハラ¹ゴウ [harago:] (腹皮) を切り、¹パルン [parun] (鯉の卵) をとり出す。カツヌ¹・バタ [kʌtsunu-bata] (鯉の内臓) は、パルン、ハラゴウとともに塩漬けにして売る。カツヌ¹・バタガラ¹ス [kʌtsunubatarasu] (鯉の腸の塩漬) は美味である。

② セーガー¹トゥリ [ʃe:ga:turi] (背皮とり)

頭を切った鯉はセーロでナヤへ運び、そこで、背鰭、尾鰭をとる。この作業がセーガー¹トゥリである。これと並行し

てなされるのがナカ¹ブニ・トゥリ
[nakapuni-turi] (中骨抜き)の作業である。取り除かれる骨をズーブニともいう。これらが済むと、鰹の大きさによって、クバン [kuban] (小判の鰹)はナカ¹ワリ [nakawari] (「中割り」の義。中骨を抜いて、二つに割ったもの)だけにし、カミ¹ブシ [kami-buji] (「亀節」の義か)用にする。チューバン [tjū:ban] (中判), ダイ¹バン [dai-ban] (大判), トウビダイ [tubi-dai] (超大判)は、それぞれヨツワ¹リ [jotsuwari] (四つ割り)にして、ミー¹ブシ [mi:buji] (「雌節」の義か), ウー¹ブシ [ʔu:buji] (「雄節」の義か)にする。

③ニコミ [nikomi] (煮込み)

④バラ¹ヌギ [baranugi] (煮あがった鰹のバラチ¹・ブニ [paratji-buni] (アバラ骨)を抜く作業である。鉄板の薄いもので、ピンセットのように作り、それを片手にもって骨をていねいに抜きとる。

⑤シル¹ク [siruku] 付け

ハラ¹ゴ¹ (腹皮)やナカ¹ブニ (中骨)の肉を搗き、デンプンを少量加えて練り、煮込みの過程で割れた節や崩れたもの、欠けたものを補修する作業。その後鰹はパイカン (煤乾)にかけられ、燻製されていく。

⑥カツ¹ピギ [katsu-pigi] (「鰹へぎ」の義か。鰹節削り)。この作業は主として婦人が受け持った。次の道具を用いる。

シー¹グ [ʃi:gu] (「剪具」の義か。小刀の意。総称)。用途により次のように分けられている。

シキ・カタナ [ʃiki-katana], シキ・

シーグ [ʃiki-ʃi:gu] (押し削りまたは押し切るために使うもの), ピキ・シーグ [piki-ʃi:gu] (引き削り用), ハラ¹クリ [harakuri] (「腹削り」の義か。腹部を削り削るのに用いる)

鰹節は肉の筋の流れを注意して削らないと失敗する。鰹節を美しく仕上げるために、小刀を使いわけた。

⑦ヒジ¹ガラ [çi:dʒi-gara] (鰹節の削りくず)これは婦人たちが持ち帰り、冬期の汁のダシ用にたくわえた。

(5)出漁

①ザコー¹・トゥリ [dzako:turi] (餌とり)

¹ザコー [dzako:] (「雑魚」の義か。餌の意)は島の前のスニ [suni] (曾根)や西表北岸の干瀬、曾根でとった。鳩間島では石垣の漁民のような専属の餌とりを雇わなかったので、乗り組み員が全員で当たった。

朝の鶏鳴と共に、ティンマムチがフナ¹カクの家を回り、乗り組み員を起こした。全員が揃うと、ザコー¹バ [dzako:ba] (餌とり場)へ行く。餌場が遠いときは午前4時頃には港を出るが、普通は夜明けと共に港を出た。

餌をとって、一回出漁することを、プス¹カブ [pʊsukabu] という。最盛期にはフタカブ [ɸʊtakabu] (2回出漁), ミーカブ [mi:kabu] (3回出漁)することもあった。その間にティンマムチは網を干し、水と薪の用意をしなければならなかった。ザコーの中の最高は、サネ¹ラ [sanera]といわれ、ヤナザ¹コー [janadzako:] (海底の巣にいる雑魚)

である。普通はバカザ¹コー〔bakadzako:〕
 というのをとる。ガサガ¹サー
 〔gasagasar:〕という雑魚は最も質の悪
 い餌と言われている。

2.2 イカ釣り漁関係語彙

イカ釣り漁も主として糸満や久高島、奥武
 島から導入されたといわれている。語彙の中
 に糸満方言の影響が多く認められるのはその
 ためであろう。明治末期以後のことである。

イカ釣りは鰹漁の終る旧暦8月～9月にか
 けてなされる。二人1組でイダフニ〔¹idaΦ
 uni〕に乗り込み、出漁する。出漁の際には
 鰹船に引かれて出る場合と、帆をかけて出漁
 する場合があった。漁場は島の西北～東北、
 20～30キロの海域であった。夜間操業である
 から、島の中岡には灯台に火を点灯して位
 置を知らせた。

イカ釣り船は、午後4時頃に出漁し、翌朝
 5時～6時頃に帰港するのが普通である。次
 に、イガメー〔¹igame:〕(「イカ海」の義。
 イカ漁の意)に関する漁具を示す。

(1)¹イダフニ〔¹idaΦuni〕(「板舟」の義。
 サバニ)の名称。

①マイ¹ジラ〔maidzira〕(「^{マエツラ}前面」の義か)。
 船先の前面。鋭三角形の部分。

②パナイ・ザキ〔panai-dzaki〕(船先の
 上面)。帆柱を倒して、掛けておく。帆
 柱を固定するために凹状に木を削り抜い
 たものを打ちつけてある。

③パナ〔pana〕(「鼻」の義か。アンカー
 ロープを通して結んでおく所)。普通は、
 アンカージナ〔¹agkar-dzina〕(アンカー
 綱)として、フー¹カラジナ〔¹Φu:kara-
 dzina〕(マーニのフーカラ〔¹Φu:kara〕(黒
 色の強力な繊維で腐敗しにくいもので

作った綱)を用いる。

④マイ・ユッカー¹マ〔mai-jukka:ma〕(小
 さな「^{マエユカ}前床」の義。板を張って両舷にわ
 たした床板。これに坐って舟を漕ぐ。

⑤ウシカキ〔¹ufikaki〕(帆柱を立てる
 ために中央に長方形の穴をあけた一種の
 梁)。厚さ約1寸5分、幅約5寸、長さ
 約4尺(これは舟の大きさによって異なる)
 の板舟の両舷側に固定されている。こ
 れは両舷側の上部に、幅約1寸、厚さ
 約7分、長さ約7寸の棒で押さえるよう
 に縛って固定してある。

⑥パラータティ¹・ミー〔para:tati-mi:〕
 (帆柱を立てるときに、根元の方を固定
 するために作られた穴。ウシカキの真下
 よりやや前方にずらせて固定してある)。
 従って帆柱はやや後方に傾いて立つこと
 になる。

⑦シー¹キサ〔¹jikisa〕(帆柱を固定する
 ために用いる一種の楔)。□型のもの二
 個と、▽型の楔一個、計三個の楔で帆柱
 の角度を調節し、風力に合わせる。

⑧マンタヌ・ヨーカ¹ミー〔mantanu-
 jo:kami:〕前方にある排水用の穴。パラ
 タティミーの直前にある。

⑨マイ・ユッ¹カ〔mai-jukka〕(前床板)。
 ウシカキの直後にある。これに坐って、
 帆を上げ下げする人を、ピーヌール
 〔¹pinuru〕(舳乗り)という。

⑩ナカ・ユッ¹カ〔naka-jukka〕(中床板)

⑪トゥムユッ¹カ〔tumu-jukka〕(舳床板)

⑫ハイ¹グワー〔hai-gwa:〕(舳の梁。直
 径2寸程度の棒を両舷側にわたし、固定
 したもの)。その下に、銅線で両舷側を
 締め、ハイグワーとしっかり巻き締めて

ある。これとウシカキの二つで、イダフニの舟腹部を固めている。

⑬ トウム¹ヌ・ユッカー¹マ [tumu-nu-jukka:ma] (「鱧の小さな床板」の義)

⑭ トウム¹ジラ [tumu:dzira] (「トモツラ」の義か)。鱧の三角形の部分。その内側には網を通す所がある。

⑮ ウシキ¹ヤー [ʔufiki:ja:] (両舷の上部を幅約1寸、厚さ約5分の板で押えたもの)。舟を漕ぐ際に櫂で両舷が摩り切れないように保護するもの。

⑯ サギ¹ヤー [sagija:] (「下げるもの」の義。直径8~10cmで、長さ約6尺の丸竹)。ローリングを防ぐための一種のフロートの役割を果たす。外洋に出漁する際には、船腹につり下げた。

⑰ タナ [tana] (板舟に荷を積む際、波頭が舟に打ちこむのを防ぐために、両舷に装着する板。幅約7寸、厚さ5分、長さ約6尺の板を二枚ずつ合わせて一組とした。主に舳先と船腹部に装着した。

⑱ カー¹ラ [ka:ra] (舟の前方舟底につける一種の竜骨)。これはプーザン¹プー [pu:dzampu:] を張って操船する際、波を切って風上に舟を走らせる役割を果たす。

⑲ ヤク [jaku] (櫂)。

ヤコー¹マ [jako:ma] (小さい櫂)、トウム¹ヤク [tumu-jaku] (鱧の櫂)、幅が広く、船頭が舵とりに用いる。

⑳ ユー¹トル [ju:turu] (船の塗を汲みとる道具)。アカ¹トゥルともいう。^{アカ}マチ [matʃi] (松)の幹を削って作る。

㉑ プー [pu:] (帆)。帆には次の種類がある。

㉒ フクル¹・プー [ʔukuru-pu:] (和船形式の帆。柱が帆の中心に来るように作られている)。

㉓ プーザン¹・プー [pu:dzam-pu:]。沖繩のサバニ独特の帆である。竹の竿(直径約3cm、長さ約2m40cm)を帆の棧に用いて作った帆。

㉔ ミナー [minɑ:] (帆をつり上げる縄)

㉕ ティン¹ナー [tinna:] (帆を操作するために、帆の片側から5~6本の小さい縄が船頭のところにのびているもの)。

(2) イガメードング [ʔigame:donggu] (イカ釣り用の漁具)

① イガ¹ランプ [ʔiga-rampu] (イカ漁に用いる集魚灯)。直径約10~15cmの底の広い、長さ40~50cmの円筒形のブリキ板製の油タンクに、直径約5cmのトゥー¹ジン [tu:dʒij] (灯芯)をつけたもの。炎が雨水をかぶらぬよう、ブリキ板のカバーをつける、タンク部に柄を付け、舷側に取付けたM字形の直径4ミリ程度の針金にランプの首を掛けて固定する。

② ナーブ¹ク [na:buku] (縄箱)、杉板で作った縄箱。中蓋を設けて箱の中を二段にしてある。海に浮かべても、雨に打たれても、漏水しない。

③ キー¹プゾー [ki:pudzo:] (木を削り抜いて作った円筒形の、蓋付きの煙草入れ)。

④ イガバーキー [ʔigaba:ki:] (イカを入れる竹製の籠。籠の中でも最大級のもの)。

⑤ イガナー [ʔigana:] (イカ釣り用縄)

⑥ イガジー [ʔigadzi:] (イカ釣り用餌木)

⑦カキ¹ヤー [kəkija:] (イカを引っ搔けて釣る漁具)。直径6～7ミリの鉄線の先に、直径3～4ミリの鉄線で作った針を曲げて鉤にし、それを7～8本針金で巻きつけ、縛りつけたもの。柄をつけて、長さ約1メートルにしたもの。

⑧サバ・ガキヤー [saba-gakija:] (マグロやサメ等を釣りあげるときに使う道具)。直径8～9ミリの鉄線の針を曲げて、柄をつけたもの。これで鰓の部分をはっかけ、固定して切る。

⑨サバカタナ [sabakatana] (サバ [saba] <鮫、鱈> を釣りあげるときに、舷側に引き寄せ、サバガキヤーで固定して頸部を切るのに用いる刀)。滑りどめに、柄の部分に波型に切りこんである。

⑩サバナー [sabana:] (鱈釣り用の縄)

⑪アン¹カージナ [ʔaŋka:džina] (イカ釣りの際に潮の流れに舟が流されるのを防ぐため40～50尋の藁縄に重石をつけて海中に投下するもの)。

⑫イガヤマ [ʔigajama] (イカをつるして日干しにするもの)。浜辺に高さ約2メートルの垂木をほぼ2メートル間隔に5～6本立て、それに藁縄を数段張り、イカをかけ、つるして日干しにする道具。一日目はこれで干し、二日目からはシダールに並べて日干しにする。

⑬シダール [ʃidaruru] (「すだれ」の義。ユシ¹キ [juʃiki] <すすき> で作った簾)。長さ約2メートル。ススキの葉を取り除き、藁縄で編み、庭さきに広げてイカを干すのに用いる。イガヤマで干した半乾燥のイカをこれで二、三日干すと完成品になる。

⑭ミーカン¹ガン [mi:kaggan] (水中めがね)。

2.3. パイ¹ナー [paina:] (延縄)

鳩間では本格的なパイナーはなされなかった。¹イノーパイナー [ʔino:paina:] と称して、沿岸のイノーで行われる簡単なものがあるのみである。本縄に約1メートル間隔にユダナー [judana:] (枝縄) をつけ、釣り針をつけてイノーに沈め、片方に浮きをつけ釣る漁法である。

2.4. タティ¹ナー [tətina:]

¹イダフニ [ʔidaɸuni] (板舟) でピーヌ¹・クシ [pi:nu-kyʃi] (干瀬の裏側。外洋部) や、¹スニ [suni] (曾根) などへ行き、アンカーを下して揺れないようにし、釣り縄を下して、深い所にいる魚を釣る漁法。カブ [kabu] (魚を集めるために、カニなどを砂と一緒に搗きつぶしたもの) を撒いて魚を集める。

3. 養殖漁業

3.1. イー¹シ [ʔi:ʃi] (つのまた)

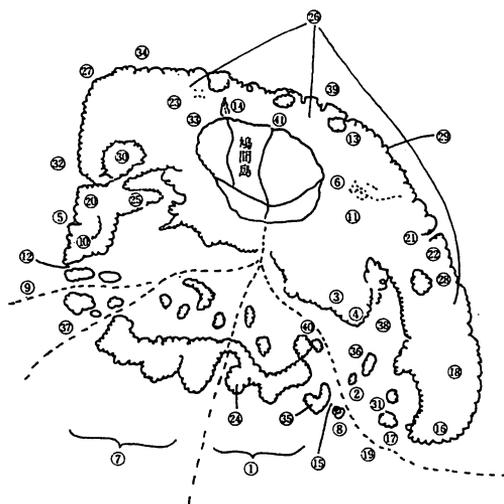
鳩間島の前方のタカ¹ビー [takabi:] (高干瀬) とマイ¹ズニ [maidzuni] (前曾根) は、鳩間水道を中に挟んで、西表北岸側のイー¹シビー [ʔi:ʃi-bi:] (つのまた干瀬) と向きあっている。約二万坪の広さといわれるイー¹シビーは、中央部にフツァー¹マ [ɸʊtsa:ma] という津口を有している。クーラ [ku:ra] (久浦)、¹インダ [ʔinda] (伊武田)、トゥマダ [tumada] (泊田)、ケー¹ダ [ke:da] (慶田)、ユシ¹キダー [juʃkida:], サキンダ [səkinda] あたりへ行くイダフニは、このフツァー¹マを利用する。フツァー¹マより西側の干瀬をイーリジマ [ʔi:ridžima] といい、東側の干瀬をダイ¹ク・ビー [daiku-bi:], ウブ¹ビー

[?ububi:] という。このウブ¹ビー、ダイ¹クビー、イーリジマに養殖されているイー¹シ [?i:ʃi] は、鳩間島の人が昔小浜島のクバザキ [kubadzaki] あたりより移殖したものとされている。

イー¹シは日干し乾燥の後、再度水につけると脱色する。それを鍋に入れて煮ると溶解し、ゼリー状になったものを食紅で着色したり、黒糖で味つけしたりして食用に供した。それを、イーシヌ・コー¹マ [?i:ʃinu-koma] (つのまたの卵) という。寒天の材料として輸出される以前は、自家消費するのが普通であった。

3.2 シンドー¹ラ [ʃindo:ra] (もずく)

鳩間島環礁地名



- | | | |
|----------------|----------------|---------------|
| ① アーラ・マイズニ | ⑬ タカビ | ⑳ フターチスニ |
| ② アーヤ・ブイ | ⑭ タカビス・インタス・スニ | ㉑ フチマチル |
| ③ アガジル | ⑮ タカビス・ウブイシ | ㉒ ファンシキ |
| ④ アガナーサキ | ⑯ タカビス・フチ | ㉓ ボーダヤー |
| ⑤ アマセヌ・フチマチル | ⑰ トウグワー | ㉔ マルスニ |
| ⑥ アンタヌ・ズンズヌ・フチ | ⑱ ナーバレー | ㉕ マチャーヘースニ |
| ⑦ イーリ・マイズニ | ㉒ ナーバレーヌ・ウブイシ | ㉖ ミーグチグワー |
| ⑧ イシケーズニ | ㉓ ナカウール | ㉗ ミズスカン |
| ⑨ ウーグチ | ㉔ ナカヌ・スニ | ㉘ ヤトウ |
| ⑩ クーシビ | ㉕ ビーナーサキ | ㉙ ヤマタジル |
| ⑪ クサン・クムル | ㉖ ビーンティジ | ㉚ シマナカヌ・ファンシキ |
| ⑫ クチグワー | ㉗ ビザキ | |
| ⑬ クザラブジャー・クムル | ㉘ ビナカン・クムル | |
| ⑭ ズンズン | ㉙ ファムスタ | |
| ⑮ シンビンヤー | ㉚ フキクムル | |

当初、鳩間島では一部の人が食していたが最近では高級料理の素材となっている。海底の砂地で繁殖する。採取して日干し乾燥品にし輸出する。

3.3 ナツァー¹ラ [natsa:ra] (海人草)

マクリのこと。回虫を駆除するため、乾燥したナツァー¹ラを煎じ、黒糖を加えて子供に与えた。一種の駆虫剤である。島の前の遠浅の海底に自生しているのを毎年一度採取して保存した。駆虫剤が発達する以前は貴重な換金用の海産物の一つであった。小学校では夏に一度、父母の協力を得て、一斉に煎じ汁を飲ませた。苦い味がする薬用食品である。

4. 魚名

『原色沖縄の魚』の番号	和名	鳩間方言	波照間方言
1	みすじりゅうきゅうすずめ	{ p̄jki (古) ç̄jka:gwa:	ʔinubʔinu-ŋa:
2	るりすずめ	ʔau-p̄jki	
3	れもすずめ	ʔaga-p̄jki	
4	でばすずめ	gabara	ʔo:bʔika
5	くらかおすずめだい	gabara	ʔo:p̄jsi
6	しりすずめだい	gabara	fjtsafyk'urumja
7	おきなわすずめ	gabara	
8	すずめだい	gabara	
9	もんすずめだい	gabara	k'ʔʔupira:
10	あまみすずめ	gabara, ffup̄jki	ゝ
11	ろくせんすずめだい	gabara	ʔo:p̄jsi
12	おやびっちゃ	gabara	ʔo:p̄jsi
13	やりかたぎ	{ b̄ake:	ʔafu
24		{ k̄asampa:ʔidzu	(15, 16, 22) k'ap̄itsa (24) p'ap̄adzira:
25	めがねくろはぎ	kus̄yku	bunubʔi
26	きいろはぎの変種	kus̄yku	bunubʔi
27	くろぐちにぎ	kus̄yku, buna:	buna
28	くろもんつき	biḡ-kus̄yku	buna
29	かんらんはぎ	{ t̄ykadz̄a: ŋupura:ʔidzu	buna
30	くろはぎの仲間	{ t̄ykadz̄a: ŋupura:ʔidzu	(29, 30) ho:ra (ʔagabani-ho:raともいう)
32	みやこてんぐ	ʔaga-finuma:ru	buna:rja
33	てんぐはぎ	finuma:ru	(kaja の一種) (syḡomara)
34	つまりてんぐ	{ finuma:ru tu:finuma:ru	matsi の一種
35	てんぐはぎの仲間	massa	
36	とさかはぎ	tu:finuma:ru	matsi (ne:nu 上盛氏)
37	ひめあいご	ʔaga-pi:ka:	kaë:

38	さんごあいご	?aga-pi:ka:	kaë: の一種
39	まじりあいご	?aka-pi:ka:	
40	あみあいご	?ai-idzu	$\text{ë:Φa: (ë:naha: 上盛氏)}$
41	はなあいご	?onde:	džurumaku
42	じやばあいご	me:nu-?idzu	džurumaku
43	しもふりあいご	pi:ka:	kaë: の一種
44	おちあいご	pi:ka:	kaë:
45	ごまあいご	ka:e:	kaë:
46	もんがらかわはぎ	to:Φykurabe	džurigami
47	たすきもんがら	Φykurabe	?ajaΦukurabi
48	くらかけもんがら	Φykurabe	ssuΦukurabi
49	いそもんがら	gitfina	džigina
50	きへりもんがら	gitfina	džigina
51	なめもんがら	tu:gitfina	Φykurabi の一種
52	ごまうまづら	ka:ga:	?uru-Φukurabi
53	うすばはぎ	sensuru	
54	そうしはぎ	sensuru	(jaratamabi 上盛氏)
55	いらもどき	[ssabe:	
56	ごいしべら	[ssabe:	
57	せなすじべら	[ssabe:	ssontsa
58	しろたすきべら	[ssabe:	?o:ni
59	きぬべら	[ssabe:	?o:fytsabi
60	たれくちべら	?anapure:	
61	くぎべら	[ssabe:nu-gu:	gajaburja-fytsabi
62	ぎちべら	[ssabe:	(manigu の一種, 上盛氏)
64	きつねあまだい	biki-?anapure:	ma:fytsabi
65	とからべら	[ssabe:	phi:ju:
66	めがねもちのうお	çiro:sa	phi:fytsaŋ
68	きつねだいの仲間	?agage:	
71	くさびべら	makabu	
72	くろくらべら	makabu	(no:ju 上盛氏)
73	いろぶだい(雄)	?a:gatfa:	phi:maribonda
74	いろぶだい(雌)	[mi:haga	(fytsimaribonda 上盛氏)
75	ぶだいの仲間	gudzira-Φytai	butumunu (gudzira-fyte ^r 上盛氏)

76	きつねぶだい	bo:da	butumunu
77	ひぶだい	?a:gai	ssafuku
78	ぶだいの仲間	?aga-irabutji	?irabutsi
79	いちもんぶだい	{ ?aga-irabutji na:bu-?irabutji	?aga-bonda
80	なんようぶだい	?au-pinakaj	gumatsi
81	すじぶだい	?irabutji	?irabutsi
82	おおもんはげぶだい	?au-?irabutji	?irabutsi
83	ぶだいの仲間	ffu-?irabutji	batasa-?irabutsi
84	はげぶだい	?au-?irabutji	?o-?irabutsi
85	ちょうちょうこしょうだい	ku:re:	mēnumisi
86	むすじこしょうだい	ku:re:	p'gumaga
87	あやこしょうだい	kij-ku:re:	p'gumaga
88	くろこしょうだい	ku:re:	
89	おしゃれこしょうだい	ku:re:	
90	ころだい	ku:re:	
91	くまささはなむろ	{ ?uku (gurukuj の一種)	gurukuj
92	たかさご	ko:sa:(gurukuj)	sane:ra
93	うめいろもどき	{ ?akadzū (mure:dzi) gurukuj	butusyūmja
94	ささむろ	çira:(gurukuj) 平たい体で大きい	
95	はなたかさご	çira:(gurukuj)	
96	ゆめうめいろ	çira:(gurukuj)	gurukuj の一種
97	あかまつの仲間	Φytjisubu	sipu
98	うろこまつかさの仲間	Φytjisubu	fusipu
99	うけぐちいっとうだいの仲間	?agaidzu	mi:maraju
100	はなえびす	?agaidzu	?irIkku-maraju
101	すみつきえびす	biki-pajina	?e:ba:sī
102	いっとうだいの仲間	pajina:	?e:ba:sī
103	とがりえびす	mi:pajina	p'as'ija
110	ひとすじいしもち	firu-?u:mi:	?ifandurumja
111	みなみふとすじいしもち	furigwa-?idzu	?ifandurumja
113	おきなわめぎす	?agage:	?igaju:
114	はなごい	dzurigwa:?idzu	

122	さらさはた	[nibar <u>u</u>	<u>ʔifofyku-ni-bari</u>
123	やまぶきはた	<u>ʔakadzina</u>	<u>ʔamutsi</u>
124	すじはた	<u>ʔakadzina</u>	<u>ʔagadzij</u>
125	すじはたの仲間	<u>ʔakadzina</u>	<u>fundzij</u>
126	にせずじはた	<u>ʔakadzina</u>	<u>ʔagadzij</u>
127	ゆかたはたの仲間	[nibar <u>u</u>	(fundarimja: 上盛氏)
128	しまはた	[fibarukami	
129	あおのめはた	[nibar <u>u</u>	<u>ʔop'atu-ni-bari</u>
130	にじはた	<u>ʔaganibaro:ma</u>	<u>ʔagada-ni-bari</u>
131	ゆかたはた	<u>ʔaganibaru</u>	<u>t'ak'amin-ni-bari</u>
132	あかはたの仲間	<u>ʔaganibaru</u>	
133	ばらはた	<u>ʔagadzij</u>	<u>ʔagadē:</u>
134	あずきはた	[nibar <u>u</u>	<u>ʔagafytsi-ni-bari</u>
135	かんもんはた	<u>ʔifi-nibaru</u>	<u>jattsu-ni-bari</u>
136	あかはた	<u>ʔaga-nibaru</u>	
137	なみはた	[nibar <u>u</u>	<u>ni-bari</u> の一種
138	せだかあかはた	[nibar <u>u</u>	<u>ni-bari</u> の一種
139	おおもんはた	[nibar <u>u</u>	<u>ni-bari</u>
140	しろぶちはた	[nibar <u>u</u>	<u>p'imujaga-ni-bari</u>
141	まだらはた	<u>judaja-nibaru</u>	<u>birigar-i-ni-bari</u>
142	ほおきはた	[nibar <u>u</u>	<u>ni-bari</u> の一種
143	つちほぜり	<u>takaba:nibaru</u>	<u>ni-bari</u>
144	まはた	<u>ʔara-nibaru</u>	<u>ni-bari</u>
145	くろめじな	<u>fjtsu (matu)</u>	<u>ba:ba-sjtsu</u>
146	おきなめじな	<u>fjtsu (karasa-fjtsu)</u>	<u>ba:ba</u>
147	てんじくいさぎ	<u>ba:ba</u>	<u>ba:ba-sjtsu</u>
148	いすずみ	<u>mato:</u>	<u>ssaba:ba</u>
149	いしがきだい	<u>garasa-nibaru</u>	(151) <u>ʔisi-ni-bari</u> (152) <u>ʔota-ni-bari</u>
153	おにだるまおこぜ	[ʔabaidzu	<u>minfutsari-ʔifaba</u>
154	ひめおにおこぜ	[ʔabaidzu	<u>nibari-ʔifaba</u>
155	うつぼの仲間	{ [ʔudzi kaminuku:-ʔudzi	<u>ʔudzi</u>
156	おながうつぼ	{ [ʔudzi tatfi-ʔudzi	<u>ʔaga-ʔunnag</u>

157	みなみひめじ	k̄atakaji	muna-k'̄ata:sī
158	いんどひめじ	d̄jimba	(ssa-k'̄ata:sī 上盛氏)
159	おうごんひめじ	d̄jimba	
160	まるくちひめじ(若魚)	d̄jimba	ʔo:k'̄ata:sī
161	こばんひめじ	d̄jimba	ʔaga-k'̄ata:sī (muna-k'̄ata:sī 上盛氏)
162	ひめじの仲間	d̄jimba	
163	もんつきあかひめじ	k̄atakaji	juru-k'̄ata:sī (ʔagamo:rī 上盛氏)
164	りゅうきゅうあかひめじ	d̄jimba	ʔaga-k'̄ata:sī
165	ろくせんふえだい	ʔagamut̄ji	ʔamutsī
166	きんせんふえだい	jamatu-su:be:	fumutsī
167	たてふえだい	su:be:	
168	きすじたるみ	su:be:	
169	あみめふえだい	su:be:	
170	にせくろほしふえだい	jamatu-su:be:	jamattubja
171	おきふえだい	su:be:	(jamattubja 上盛氏) (jamattubja ♪)
172	いってんふえだい	su:be:	
173	ひめふえだい	mimidga:	na:daka
176	ばらふえだい	ʔakana:	
181	いとふえふき	[muru	s'̄īp̄e:
182	ほおあかくちび	[muru	mo:r̄iju:
183	はなふえふき	Φ̄yt̄jinai	
184	いそふえふき	Φ̄yt̄jinai	n̄imbis̄ip̄i
185	しもふりふえふき	tamaj	n̄imbis̄ip̄i の一種
186	はまふえふき	tamaj	n̄imbis̄ip̄i の一種
187	ふえふきだいの仲間	tamaj	
188	あまくちび	ʔakabata	
191	よこしまふえふき	ʔaburu	ʔo:buru
192	きつねふえふき	ʔumuna:	(muna 上盛氏)
193	よこしまくろだい	daruma:	ssadurumja
194	めいちだい	ssu.ʔidzu	
195	しろだい	ssu.ʔidzu	
196	さざなみだい	ssu.ʔidzu	
198	のこぎりだい	mut̄ji-idzu	fu-mutsī

199	ながめいち	<u>?</u> akabata	
200	たまめいち	<u>?</u> akabata	
203	へだい	[<u>fin</u> -idzu	
204	きちぬの仲間	{ <u>gaku:gaku</u> : (大型) [<u>fin</u> -idzu	
206	よこしまたまがしら	[<u>mi</u> :buta	(<u>mutuna</u> 上盛氏)
217	はまだい	<u>?</u> akamat <u>fi</u>	<u>nagad<u>su</u></u> - <u>matsi</u>
223	あおちびき	<u>?</u> o:mat <u>fi</u>	(218) <u>?</u> aga-matsi (223) <u>?</u> o:-matsi
240	ながたちかます	[<u>?</u> gga:	
248	ぐるくま	{ <u>mure:dg</u> i (成魚) <u>sane:ra</u> (幼魚)	
249	にじょうさば	[<u>ku</u> sara:	<u>fu</u> tsara
250	いそまぐろ	<u>tu</u> kaki <u>ŋ</u>	<u>t'u</u> kaju:
251	かますさわら (幼魚)	<u>sa</u> :ra	<u>sa</u> :ra
252	よこしまさわら	<u>sa</u> :ra	
253	おにかます	<u>fj</u> kiru-kamasa:	<u>k'a</u> masa:
254	おおかます	<u>ka</u> masa:	<u>k'a</u> masa:
255	おおめかます	<u>?</u> akabani-kamasa:	<u>k'a</u> masa: (p ^s iŋgī 上盛氏)
256	やまとかます	<u>ka</u> masa:	<u>k'a</u> masa: の種類
257	くさやむろ	<u>na</u> gaidzu	
258	めあじ	[<u>g</u> ats <u>u</u> ŋ	
259	づながめあじ	[<u>g</u> ats <u>u</u> ŋ	
260	ほそひらあじ	[<u>g</u> ats <u>u</u> ŋ	
261	まるひらあじ	<u>ga</u> :ra	
262	よろいあじの仲間	<u>ga</u> :ra	
263	いとひらあじ	<u>ga</u> :ra	(<u>ba</u> : <u>ba</u> ra 上盛氏)
264	よろいあじの仲間	<u>ga</u> :ra	(<u>ga</u> ra <u>ŋ</u> 上盛氏)
265	かすみあじ (若魚)	<u>ga</u> :ra	<u>ba</u> : <u>ba</u> ra
267	かいわりの仲間	<u>ga</u> :ra	
268	いんどかいわり	<u>ga</u> :ra	
269	ろうにんあじ (若魚)	<u>ga</u> :ra	
272	こばんあじ	[<u>ma</u> tasaka:	
273	つむぶり	<u>na</u> gaidzu	<u>na</u> gaju
275	まるこばん	<u>ga</u> :ra	

281	ことひき	[?] ajamasa	
286	おおくちさぎ	ko:Φu	
287	はも	[[?] udgi	
288	きりあなご	[[?] udgi	t̚aku:- [?] unnag
291	とらぎすの仲間	buri-padara	bunadarja-Φa:
294	こち	Φyɫjinafi-idzu	
296	てんじくかれい	p̄jsa-idzu	k'at̚ap̄jsaju
297	とげだるま	p̄jsa-idzu	k'at̚ap̄jsaju
298	もんだるまがれい	p̄jsa-idzu	k'at̚ap̄jsaju
299	あまみうしのした	p̄jsa-idzu	k'at̚ap̄jsaju
300	みなみうしのした	p̄jsa-idzu	k'at̚ap̄jsaju
301	さざなみはぜ	sa:Φyke-idzu	jutsabja
303	かえるうお(雌)	mut̄jinuba	jutsabja
304	やくしまいわし	padara	padara
305	ひめめなだ	s̄akura:ma	bura
306	ふうらいぼら	{ [?] agapani-bura kimbani	bura
307	つばめこのしろ	syku-idzu	
309	はこふぐ	maffa- [?] idzu	k'ȳr̄ubasi
310	こんごうふぐ	maffa- [?] idzu	k'at̚f̄i:kag
311	ねずみふぐ	[?] abasa(:)	[?] ij̄k̄abwa
312	はりせんぼん	[?] abasa(:)	{ [?] abas̄jtutu ([?] ij̄k̄aboともいう)
314	やまとみずん	jamatu-midzunu	
315	ミズスルル	[kibi	
316	みなみきびなご	f̄i:ra	
317	つまりとびうお	tubi-idzu	t̄yp̄ij̄ju
318	あやとびうお	tubi-idzu	t̄yp̄iju (bataboとも)
319	まとうとびうお	tubi-idzu	[?] agapani-t'ȳp̄ij̄ju:
320	おおめなとび	tubi-idzu	t̄up̄ij̄ju
321	とおさより	f̄id̄gi	
322	りゅうきゅうさより	{ pane:dza pafe:dza	
323	まるさより	{ pane:dza pafe:dza	

324	せんになさより	{ pane:dza paŋe:dza	
325	ほしさより	{ panerdza paŋerdza	
326	だつの仲間	fidzi	
327	たいわんだつ	fidzi	[?] unssiŋ (t'fidzi とも)
328	おきざより	fidzi	[?] unssiŋ
329	てんじくだつ	fidzi	
330	はまだつ	tu:fidzi	gakkja
331	かつお	katsu-idzu	katsu:
332	すま	ma:gatsu	[?] abura-katsu:
333	はがつお	ma:gatsu	
334	そうだかつお	si'buta	si'si'buta:
335	くろまぐろ	[[?] uŋi-subi	[?] usi-fibi
336	きはだ	kimbani-subi	dai-fibi
337	びんなが	na:pani-subi	dai-fibi
338	めばち	mi:subi	dai-fibi
339	ばしょうかじき	pani-aki	[?] aki ([?] akitaro とも)
340	まかじき	[?] akitaro:	[?] aki
341	くろかじき	[[?] aki	[?] aki
342	しろかじき	çirakusa:	[?] aki
343	ふうらいかじき	paniaki	[?] aki
344	めかじき	çirakusa:	[?] aki
348	あかえい	[kamanta	
			(351) s'q̄ha: (s̄q̄pa:)
357	おながざめ	[?] e:dzi	
358	しゅもくざめ	[?] i:pai-saba	
359	よごれ	[?] u:bani	
360	よしぎりざめ	[?] o:nandza:	
361	あおざめ	[?] ukidza:ra	
362	めじろざめ	mindana:	
364	ほほじろざめ	[?] ittfo:	
366	じんべいざめ	midzi-saba	
	ごばんざめ	Φunaŋturu	
	ユトヒキ	[?] ajamasa	

本稿の資料は、主として筆者の父、加治工伊佐（80歳）をインフォーマントに1985年8月～9月にかけて調査して得たものである。魚名の調査にあたっては『原色沖縄の魚』（具志堅宗弘著）のカラー写真を提示し、その方言名を採録する方法をとった。

波照間方言の魚名調査も同様な方法で実施した。話者は越地嘉吉氏（大正4年8月5日生）と上盛政弘氏（明治45年3月26日生）である。両者で魚名に違いが起きると、そのまま採録し、話者名を記して違いを示した。貴重な時間を割いて調査に協力して下さった話者の方々に深く感謝の意を表する。

尚、1985年の夏に波照間方言調査を実施する機会を与えて下さった恩師平山輝男博士に対しても深く感謝の意を表する。